

タイトル	土屋博教授挨拶(退職記念)
著者	土屋，博
引用	北海学園大学人文論集，42：25-26
発行日	2009-03-25

近さの内へと入って行くこと

土 屋 博

「……を去るにあたって」という形で感慨を求められたとき、対応の仕方は人によって異なるが、最も無難なやり方は、これまでの処遇に対して各方面への感謝を述べ、今後の抱負を控えめに語ることであろう。しかし、そのようなそつのなさに安んじえない正直な性格の持ち主は、つい本音を吐いてしまい、人によってはむなしさをつぶやいてみたり、注文をつけて鬱憤をはらそうとしたりする。そうした発言は、当然のことながら、あまり好意的には受け取られない。そこで私は、それらのいずれの方向をも避け、「去る」という事柄について、あらためてその根底にある意味を考えてみようと思う。節目にあたって、人は簡単に「去る」と言うが、一体どこからどこへ去るのであろうか。そもそも「去る」とはどういうことなのであろうか。

何かの折に耳にした言葉で、なぜか気にかかり、忘れられない言葉がある。私にとってそのような言葉の一つが“Gelassenheit”というドイツ語である。これは哲学者マルティン・ハイデガーが好んで語った、いわゆるハイデガー用語に属する。辻村公一氏はこれを「放下」と訳しているが、これは適切な訳であろう。ハイデガーは、第二次世界大戦を間に挟んで書き記した二種類の文章をつなぎ合わせ、1959年に一冊の書物として出版したが、その著書の表題が“Gelassenheit”であった。ここには、晩年になるにつれてますますわかりにくくなった彼の謎のような言葉が書き連ねてあるが、事柄の根底を究めようとする熱意は行間から伝わってくる。

誤解を恐れず簡略化して言えば、この言葉によってハイデガーが語ろうとしたのは、おおよそ次のようなことであつたと思われる。すなわち、われわれは一方で、技術的世界の対象物を内に入り来らせ、避け難く使用す

ることによって、それらに対して「然り」と言う。しかし同時に他方では、われわれはそれらを外の物として、それら自身の上に置き放つことによって、「否」と言うことができる。ハイデガーはこの二つの態度を、両方の表現に含まれている“lassen”という動詞をもじって、「物へのかかわりの内における放下 (Gelassenheit)」と呼ぶ。これによって人間は「落着き」を得るのであるが、ここで言う「放下」は、神に背く罪深き欲望を放棄することなどとは、意味合いを異にする。ここでは人間は、何かを為すのではなく、いかなる慰めをも期待せずひたすら「待つ」。しかしながらそのさい、行動力を失い、すべてを放任するわけではない。ハイデガーはこれを、ヘラクレイトスの言葉を引用しつつ、「接近」(アンキバシエー) すなわち「近さの内へと入って行く」と名付ける。この考え方の背後には、人間の「土着性」をめぐるハイデガーの思いがあるが、それについてはふれないでおく。

「去る」という事態のたたずまいは、この「放下」に似ているように思われる。この七年間私は、授業の合間に研究室の窓から藻岩山とそれに続く山なみを眺めながら、読んだり・考えたり・書いたりしてきた。山々は、あるときはくっきりと全貌を現したが、またあるときは霧や吹雪に包まれて、ほとんど見るができなかった。4月以降も、それらは同じようであり続ける。この間私が形にして発表した研究は、次に列挙されているが、いつものことながら、意味ありげにこれらを提示することには、あまり気が進まない。今やその種のことをことごとく「放下」し、人間が本来喚ばれている彼処、すなわち、自己のありかへの「接近」を目ざして、「落着き」のうちに生と死のはざまを歩み続けたいと思う。